

## 日本ロシア文学会

## 関東東北支部報 No. 42 (2024年5月)

〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33 千葉大学 人文科学研究院 大森雅子研究室気付  
日本ロシア文学会関東東北支部事務局  
E-mail: kanto.yaar@gmail.com

## 【ご挨拶】

来る2024年6月1日(土)10:30より、東京大学本郷キャンパスで日本ロシア文学会関東東北支部研究発表会を開催いたします。11本の修士論文成果報告と、2本の博士論文成果報告がおこなわれます。その後、支部総会と懇親会も開催する予定です。オンラインで研究発表会及び支部総会に参加ご希望の方は、下記URLにある申込フォームに必要事項をご記入の上、送信してください。登録完了後、Zoom接続情報等を含む確認メールが届きます。

(1) 日本ロシア文学会関東東北支部研究発表会(文学) (修士論文成果報告部門①文学)

登録リンク <https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/meeting/register/tZ0rcO2qqzsuGdTowLm9xhBWQMDgOelaSI3w>

(2) 日本ロシア文学会関東東北支部研究発表会(言語・芸術) (修士論文成果報告部門②言語・芸術/博士論文成果報告部門/総会)

登録リンク <https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/meeting/register/tZMvdeivrz0vG9LXguSunXfUXro-1R2Wm-H>

本報に発表要旨を収録しております。どうぞふるってご参加ください。

楯岡求美

## 【研究発表会プログラム】

10:30 開会：支部長挨拶

場所：法文1号館113番

【修士論文成果報告部門 ①文学】  
場所：法文1号館113番

10:40-11:10 梅谷 彩香 (東大院修了)

「銀の時代ロシアのアポロン主義芸術論

——アキム・ヴォリンスキー、マクシミリアン・ヴォローシンを中心に」

司会：草野 慶子 (早大)

11:10-11:40 飯濱 碧輝 (早大院)

「ジュコフスキイ「村の墓場」(1802)におけるエレジーの主体の革新

——時空間との関係を中心として」

司会：鳥山 祐介 (東大)

11:40-12:10 石川 顯法 (法政大院)

「ゴンチャロフ『断崖』研究 ——苦悩するヴェーラー——」

司会：澤田 和彦 (埼玉大)

12:10-13:10 昼休憩

13:10-13:40 栗原 かおり (早大院)

「マリーナ・ツヴェターエフ「別れ」における詩作のテーマ」

司会：前田 和泉 (東外大)

13:40-14:10 宮 将仁 (東大院)

「ロシア・フォルマリズムと生産主義」

司会：八木 君人 (早大)

14:10-14:40 安井 靖雄 (東大院修了)

「ソルジェニーツィン『第一圏のなかで』について

スターリンと外交官ヴォロディンの人物像形成を中心に」

司会：越野 剛 (慶応大)

14:40-15:10 木田 貴久 (東大院修了)

「アンドレイ・ペールイ『ペテルブルク』における都市空間についての分析

——ドゥートキンの屋根裏部屋を中心に——」

司会：松本 隆志 (早大)

[修士論文成果報告部門 ②言語・芸術]  
場所：法文 1 号館 112 番

- 13:10-13:40 山田 智子 (東外大院修了) 司会：古賀 義顕 (東海大)  
「初学者ではない L2 ロシア語の語頭無声摩擦音/sj/の音声的特徴」
- 13:40-14:10 若月 花帆 (東外大院) 司会：堤 正典 (神奈川大)  
「ロシア語における所有構文の統辞構造について」
- 14:10-14:40 田中 春菜 (東外大院修了) 司会：阿出川 修嘉 (上智大)  
「BE 型言語である現代ロシア語における HAVE 型動詞 иметь の使用範囲」
- 14:40-15:10 飯田 有季 (千葉大院修了) 司会：上野 理恵 (早大)  
「ヴェレシチャーギン絵画における印象派とジャポニズムの影響  
——「1812 年シリーズ」「ロシア・シリーズ」から「日本シリーズ」へ——」
- 15:10-15:20 休憩

[博士論文成果報告部門]  
場所：法文 1 号館 112 番

- 15:20-15:55 梶 彩子 (早大院次席研究員・学振特別研究員-PD) 司会：斎藤 慶子 (早大)  
「バレエとプラスチックの狭間：20 世紀バレエ史における振付家レオニード・ヤコプソンの位置づけ」
- 15:55-16:30 光井 明日香 (東外大他非常勤講師) 司会：井上 幸義 (上智大)  
「現代ロシア語における性に関する一致をめぐって」
- 16:30-16:35 休憩
- 16:35-17:05 支部総会 場所：法文 1 号館 112 番
- 17:30- 懇親会 場所：ピアンタ本郷  
(東京都文京区本郷 2 丁目 30-7)

## 日本ロシア文学会 関東東北支部報 第42号

## 目次

## 【支部長 巻頭言】

楯岡 求美	「未来に向けて」	5
-------	----------	---

## 【研究発表会 報告要旨】

## [修士論文成果報告]

梅谷 彩香	「銀の時代ロシアのアポロン主義芸術論 ——アキム・ヴォリンスキー、マクシミリアン・ヴォローシンを中心に」	6
飯濱 碧輝	「ジュコフスキイ「村の墓場」(1802)におけるエレジーの主体の革新 ——時空間との関係を中心として」	7
石川 顯法	「ゴンチャロフ『断崖』研究 ——苦悩するヴェーラ——」	8
栗原 かおり	「マリーナ・ツヴェターエワ「別れ」における詩作のテーマ」	9
宮 将仁	「ロシア・フォルマリズムと生産主義」	10
安井 靖雄	「ソルジェニーツィン『第一圏のなかで』について スターリンと外交官ヴォロディンの人物像形成を中心に」	11
木田 貴久	「アンドレイ・ペールイ『ペテルブルク』における都市空間についての分析 ——ドゥートキンの屋根裏部屋を中心に——」	12
山田 智子	「初学者ではない L2 ロシア語の語頭無声摩擦音/sʲ/の音声的特徴」	13
若月 花帆	「ロシア語における所有構文の統辞構造について」	14
田中 春菜	「BE型言語である現代ロシア語における HAVE 型動詞 <i>иметь</i> の使用範囲」	15
飯田 有季	「ヴェレシチャーギン絵画における印象派とジャポニズムの影響 ——「1812年シリーズ」「ロシア・シリーズ」から「日本シリーズ」へ——」	16

**[博士論文成果報告]**

梶 彩子	「バレエとプラスチックの狭間： 20世紀バレエ史における振付家レオニード・ヤコプソンの位置づけ」	.....17
光井 明日香	「現代ロシア語における性に関する一致をめぐって」	.....18

**【規約・執行部】**

日本ロシア文学会 関東東北支部	規約	.....19
現行執行部		.....20



## 【支部長 巻頭言】

未来に向けて

楯岡 求美 (東京大学)

2023年10月から支部長を引き継ぎました。関東東北支部会は広い地域にわたる大きな組織で、会員の皆様の研究環境も様々だと思います。支部としてどのように交流の場を作っていくのか、皆で知恵を絞りながら考えていきたいと思っています。

ロシア軍によるウクライナ侵攻に始まった一連の状況に個人としても衝撃を受け続けています。問題解決を戦争に頼ることを徹底的に反省してきたのが20世紀だったのではなかったのか。言葉は無力なのか…。

多くの人々が言葉を失う中で、ドミートリー・ブイコフは「巨大な力の前に個人は弱すぎる、個人で取れる行動が思いつかない、どうしたら良いのか」という質問に対し、「一番大事なことは個々人が正気を保つことだ。狂気の前に正気であることはとても難しい。それでもこの事態は必ず終わる。その時にどれだけ正気を保っている人がいるかが大事だ」と語気を強めて繰り返し、人々を鼓舞しました。

正気を保つこと。それは簡単なようでいて極めて難しいように思います。極めて無力で意味がないように見えてしまいますが、狂気に対抗する出発点だと思います。私たちの研究は細部の多様性から全体を検証する言語活動です。不条理であれ、対象を言語化し検証するという研究プロセス自体が、排除や抑圧の内面化の呪縛を解くのに有効な手段だと私は考えています。

孤立しないことも正気を保つうえで大切です。モスクワの劇場は驚くことにどこも満席です。現実の閉塞感からの逃避という側面も確かにあるのだと思いますが、現実を理不尽だと認識する者同士が集うヴァーチャル・コミュニティとしての機能もあると言います。政治的にきわどく聞こえるイソップの言葉に反応する客席にいと、ひとりではないことが確認できる。理不尽な状況に対し、あきらめないための最低限の抵抗ではないでしょうか。

われわれのまわりでも、院生のみなさんがそれぞれの研究成果を修士論文、博士論文の形で発表されていること、若手会員の方々の意欲的な研究がロシア文学会の外部でも評価され、大きな賞を受賞していることなど、こうした状況下でもロシア文学・文化に関する研究が着実に進行していることに、個人的にとっても励まされています。

支部の活動においても互いに支えあうことで困難な状況での孤立を回避し、さらに国際的にも、様々な地域にいる私たちの優れた信頼できる友人たちとの自由な研究交流が再開できる時が来ることを願ってやみません。

## 【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門 ①文学)

## 銀の時代ロシアのアポロン主義芸術論

——アキム・ヴォリンスキー、マクシミリアン・ヴォローシンを中心に

梅谷 彩香 (東大院修了)

本発表では、2023年度提出の修士論文に基づいて、銀の時代ロシアにおけるアポロン主義の芸術思潮に注目し、象徴主義的な立場からそれを唱えた二人の批評家、アキム・ヴォリンスキーとマクシミリアン・ヴォローシンの芸術論を通じてその新たな意味づけを試みる。

アポロン主義はロシアにおけるニーチェ受容の一展開である。ニーチェは『悲劇の誕生』において、個体化の原理や美しい仮象の象徴たるアポロンと、陶酔による世界の真理との合一を示すディオニュソスという対概念を芸術の構成原理として提唱したが、ロシアでははじめ後者が広く浸透した。しかし1908～09年頃にディオニュソス主義の暴力性への批判や修正の動きが広がるなか、秩序の回復を目指す新たな芸術のシンボルとしてアポロンが注目され、その最たる例が1909年の雑誌『アポロン』の創刊である。アポロン主義に関する先行研究は少ないが、その理由としてはアポロン主義そのものは短命だった(雑誌『アポロン』を除くと「アポロン主義」と銘打った芸術運動はほとんどない)ことに加え、「ロシア的」なものとして解釈されたディオニュソス主義の陰で、「西洋的」「啓蒙主義的」なものに見なされたアポロン主義が過小評価されてきたことが挙げられよう。しかし、アポロン主義は革命を予感する当時の時代状況を強く反映し、同時期に興隆した新たな芸術思潮や表現にも、間接的であれ少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。

ヴォリンスキーは1890年代にいち早くディオニュソス主義の暴力性を見抜き、1908年から一貫してアポロン主義を唱え、雑誌『アポロン』の創刊にも多大な影響を及ぼした。のちに彼のアポロン主義は、バレエ論とヒュペルボレイオス(ギリシャ神話における極北の地)論に結実する。彼は古典バレエをアポロンの芸術と見なし、バレエの個々の動作やダンサーの個性を象徴的に解釈してそれらの本質性を追求し、身体の意識的な統御を通じた本質性の表現を「統覚」の原理として重視した。さらにヒュペルボレイオス論では、アポロン主義を、あらゆる現象的な対立を解消する、世界の根源的一元性の象徴として位置付けている。

一方で、1909年前後に構想されたヴォローシンのアポロン主義は、ニーチェのアポロンの仮象や夢の原理、ベルクソンの時間論を結びつけるかたちで、芸術を、現象世界と根源的真理の両方との繋がりを維持した中間領域として位置付け、芸術における自己意識と節度の重要性を説いている。ヴァチエスラフ・イワーノフのディオニュソス論の思想を一部受け継ぎながらも、それとは一線を画すヴォローシンの思想は、革命・内戦期における彼の詩・絵画の制作にも通底している。

以上のようなヴォリンスキーとヴォローシンのアポロン主義は、ニーチェ思想や、現象的なものに注目するアクメイズム的な傾向を超えた独自性を持ち、1910～20年代の芸術潮流におけるアポロン主義の本質や意義を解き明かすうえでも、重要な参照点と考えられる。

## 【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門 ①文学)

ジュコーフスキイ「村の墓場」(1802)におけるエレジーの主体の革新  
——時空間との関係を中心として——

飯濱 碧輝 (早大院)

本発表の目的は19世紀初頭のロシア詩においてエレジーの主題(題材と問題系、情緒)の範囲が広がった要因を、ヴァシーリイ・ジュコーフスキイの詩「村の墓場」(1802)の全詩行に関わる形式の特徴に見出すことである。19世紀初頭のロシア詩で発達したエレジーの主題の多くを詩「村の墓場」が有することは筋立ての類型論と文体論、芸術様式論によって古くから指摘されてきた。だが、既存の研究がロシア詩におけるエレジーの内容に詩「村の墓場」が影響を与えた根拠を見出してきたのは、この詩の一部の詩行のみに関わる形式の特徴である。そうした部分的特徴が詩全体の内容にどう関わるのかということはほとんど考察されていない。それ故、詩「村の墓場」に見られるようなエレジーの諸特徴とロシア詩の主題の関係は依然として不明瞭なままである。

エレジー研究のこうした課題を解決するために、本発表は詩「村の墓場」の時空間、つまり、時間構成及び空間構成と主体の関係を分析する。エレジーの主題は文学作品の形式と主体の关系到現れるため、主題の範囲が拡大した要因は時空間と主体の关系から推論できる。詩全体に関わる形式の中でも時空間を分析対象とするのは、詩「村の墓場」が19世紀初頭のエレジーと共有するものとしてこれまでに論じられてきた形式的特徴の多くがこの形式に含まれるからである。

トレミアコフスキイが『新簡約ロシア作詩法』に「エレジー」として2篇の詩を載せて以来、ロシア詩におけるエレジーの主題の範囲は一定の時空間と主体の关系によって限定されていた。1760年代には活発に劇的な発話と出来事が持ち込まれ始めたにもかかわらず、エレジーの主題は主体の悲嘆の対象、つまり、何らかの事物や状態の喪失、或いは近しい人との別れに限られていたのである。そして、現在は別れまたは喪失が起きつつある時間、或いはそれらが既に起きた時間であり、過去はそれらが起きていない時間だった。空間も別れまたは喪失によって特徴づけられていた。それ故、エレジーの最も簡素な形式を持つスマローコフの詩に、このような時空間と主題の範囲の諸特徴を見出すことができる。

一方、詩「村の墓場」では、風景における移行の観察という主体の行為が時空間の全般的特徴を定めているものの、時空間と主体の关系は可変的である。主体の行為ではなく、移り変わる主題が時間と空間の枠組みと位置を定めている。但し、夕方の風景の観察自体は当時のロシア詩において珍しくなかった。画期的であったのは同一の時空間の中で主体と時空間の关系が変動することである。この関係性を基礎としてエレジーの主体は悲嘆だけでなく、瞑想と内省、説得を行うようになり、それに伴って主題の範囲も広がることになる。



## 【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門 ①文学)

## ゴンチャロフ『断崖』研究

## ——苦悩するヴェーラ——

石川 顯法 (法政大院)

本研究は、ゴンチャロフの長編『断崖』(1869)を対象としたものである。この作品は、彼の長編三部作、すなわち『平凡物語』(1847)、『オブローモフ』(1859)、『断崖』のうち発表順で最後となる小説である。だが、この『断崖』は評判が良くなかった。この長編が発表されるや、一般読者の反応はともかく、文芸批評界では作者ゴンチャロフは容赦のない批判にさらされて四面楚歌とも言えるほどの状態におかれた。

長編『断崖』に対する評価には大きく言って二つの論点がある。一つは、この長編のもつ反ニヒリズム性、すなわち政治性で、この政治性ゆえの『断崖』に対する否定的な見方はソ連時代には概ね支配的であった。発表者がこれまでに見た『断崖』に関する先行研究の中にその政治性を否定する論は無い。『断崖』は構想から上梓までに約20年を要しているが、その時期にはロシアにおける資本主義の急速な発展、それに伴っての急進派の運動の激化があり、いわゆる“父と子”世代間の意識の乖離、人々の政治意識の分化が進んだ時代であった。ゴンチャロフは、急進派との溝を深め、彼らの主張する無神論、唯物論思想と社会に及ぼすその影響力について危機感を深めていた。付け加えておきたいのは、ニヒリズムの影響下での家庭の崩壊という問題が、ゴンチャロフが家族同様に接していたエカテリーナ・マイコヴァの出奔という事態によって、彼にとって一層深刻なものと感じられ、そのことが長編『断崖』にいつその反ニヒリズム性を与えたとする論考が多いことである。

もう一つの論点は、長編『断崖』が文学作品として優れた価値を持つものなのか、あるいは失敗作なのかという問題である。この点については研究者によって見解が異なる。この問題を考えるにあたって、発表者は長編の第二篇で「新しい」女性として本格的に登場するヴェーラに注目した。ヴェーラは近親者にとってさえ「謎の」女性として映るが、密かにニヒリストの青年マルクと恋仲になり、最後には彼との間で劇的な「転落(падение)」に至る。発表者は、長編『断崖』においてゴンチャロフがこのヴェーラの形象の創造に成功しているのか否かがこの長編の文学作品としての真価を左右する重要なキーの一つと考えた。

そのヴェーラの形象を検討するために、同時代の長中編にヒロインとして登場する幾人かの「新しい」女性達との比較を試みた。対象として選んだのは、チェルヌイシェフスキー『何をなすべきか?』(1863)のヴェーラ、トゥルゲーネフ『その前夜』(1860)のエレーナ、コヴァレフスカヤ『ニヒリストの少女』(1884)のヴェーラである。

それらの作業を経て、発表者は長編『断崖』とそのヒロインであるヴェーラについてある仮説を持つに至った。この仮説の立場に立つと、長編『断崖』にまつわるいくつかの問題が説明可能となり、この長編についてのこれまでの批評史に新たな一石を投ずることができると考えている。



## 【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門 ①文学)

## マリーナ・ツヴェターエワ「別れ」における詩作のテーマ

栗原 かおり (早大院)

本報告は、2023年度に提出した修士論文「マリーナ・ツヴェターエワ「別れ」研究」の第3章に基づくものである。本報告では、ツヴェターエワによる連作詩「別れ」(1921)には第5篇を中心に詩作のテーマが展開されていることを指摘した上で、「別れ」における詩作の意味を示す。

従来のツヴェターエワ研究では、ツヴェターエワの創作初期から中期にかけての作品の多くは詳細には扱われてこなかった。したがって、ツヴェターエワの創作中期頃に執筆された「別れ」を取り上げること自体に意義があるだろう。そして、「別れ」をはじめ、初期から中期にかけての個々の作品分析がすすめば、それらをツヴェターエワの創作史全体の中で再配置することが必要となる。ゆえに、「別れ」を論じることは、ツヴェターエワの創作史全体を新たに体系づけることへと繋がっていく。さらに、「別れ」は、十月革命後に反革命軍へと合流し、そのまま消息不明となったツヴェターエワの夫エフローンへと宛てられており、ツヴェターエワにとっての革命や内戦、ひいては亡命を考える上でも重要な作品といえる。

そうしたなかで、革命・内戦のテーマが顕著なのは第4篇および第7篇であり、両詩篇では、ゼウスが革命・内戦のメタファーとして現れているといえる。このゼウスに対し、「わたし」が第8篇で塔を上って接近し、その口元から杯を奪おうと試みる。そして、ゼウスから奪う杯が何を意味するかを考えるには、「わたし」が塔を上る過程がより詳細に描写される第5篇とあわせて考える必要がある。このとき、第5篇に読み込まれている詩作のテーマが重要な役割を果たしていると思われる。

第5篇では、冒頭より「嘶き」によって換喩的に馬が現れ、「アマゾネス」となった「わたし」が馬に乗って塔の階段を上る。このとき、「アマゾネス」という女騎士のモチーフが、詩作のテーマをもたらしていると思われる。「別れ」と対を為す物語詩「赤い馬に乗って」では、詩女神の代わりとなる詩神的存在として騎士が登場するが、物語の終盤で「わたし」自ら馬に跨り、騎士として戦場を駆ることになる。すなわち、女騎士となった「わたし」は詩神=騎士に代わる存在として現れている。また、第5篇で「アマゾネス」の乗る馬は、「翼もつ者」と呼ばれることからペーガソスとみなすことができ、ここにも詩作との連関を見出すことができる。

そして、「わたしたちの間には——流れるレーターの階段がある」という詩行で第5篇は締め括られ、ツヴェターエワとエフローンの別離が象徴的に表される。さらに、この詩行は第3篇の「わたしたちの間には〔…〕別れの／天上の川が〔ある〕」の言い換えであり、主題としての「別れ」へと繋がる。このとき、連作に含まれるはずであったツヴェターエワの詩篇「最後の魅力…」(1921)を参照すると、「わたし」が「<sup>イノセント</sup>霊感」のそれ〔追従〕で赤子を傷つけることで詩が生まれるという。つまり、この詩篇においては「わたし」が赤子を手放したところこそが「別れ」であり、「別れ」が契機となって詩作品が生み出される。したがって、第5篇で「わたし」が経験する「別れ」もまた詩作の契機とみなすことができ、詩作の開始が予見される。

このように、詩作の開始ののちにゼウスから杯を奪取することは、「わたし」が詩人としての運命を己が物にすることを意味しているだろう。そして、ゼウスが革命・内戦のメタファーであることを考慮すると、「別れ」において詩作は、革命・内戦という抗しがたい運命に抗う手段とみなすことができる。

## 【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門 ①文学)

## ロシア・フォルマリズムと生産主義

宮 将仁 (東大院)

本発表の目的は、一般に権力の要請によるマルクス主義の圧力によって終息したとされる文学理論研究の流派であるロシア・フォルマリズムの1920年代末にかけての展開を、同時代のマルクス主義的言説と照らし合わせて、生産主義理論からの影響あるいは生産主義への反発という観点から、具体的に検討することである。

V・エールリヒによる最初期のフォルマリズム研究が、そのような権力による抑圧という説をとる一方で、A・A・ハンゼン＝レーヴェのように「フォルマリズムの社会学的段階」へのマルクス主義の貢献をある程度認めつつも、ロシア・フォルマリズムが自律的に発展していったことを唱える立場もある。このような観点は、1920年代末にかけてフォルマリストが文学史を研究するにあたり、文学の歴史における進化の動因としての文学外的な要素をどのように文学システムへ組み込んでいったかを、フォルマリズムに内在して検討していった結果生じたものである。具体的には、Yu・トイニャーノフの「文学のファクトについて」(1924)の「ブイトのファクト факт быта」やB・エイヘンバウムの「文学のブイト литературный быт」(1927)が、フォルマリズムにおける文学外的な要素に該当する。フォルマリストは、文学にとって大きな意味を持つが文学外にとどまるこれらの要素を、システムとして捉えられた文学史に組み込んでいった。

しかし同時に、フォルマリストのコミットが認められるロシア・アヴァンギャルドの芸術家集団「芸術左翼戦線」で唱えられた生産主義は、フォルマリストが文学史の問題を扱った上記の諸論文が出る前からすでに、上部構造である文化の領域にとって規定的な役割を果たす、下部構造との間の中間領域を含み込むような「文学システム」を構想していた。文学作品へ形式化される素材に圧力を加え変形するような文学外的諸要素への思索は、生産主義の文学理論に始まっている。同時に、1920年代末のシクロフスキイによる悪名高いトルストイ論は「形式-社会学的方法」と銘打たれ、素材にたいする「作者の階級的利害の強い圧力」を認める点で生産主義との関係を想起させるものでありつつも、芸術作品にとっての「美学的志向」の第一義性を主張しており、芸術の実用性(つまり社会主義建設のための大衆動員)をプロパガンダした生産主義と好対照をなしている。このように、ロシア・フォルマリズムへの何らかの影響関係を想定しうる生産主義を考慮することで、フォルマリズムのいわゆる「晩年」に起きた理論の変化が、より実態に即した形で明らかになるだろう。

**【研究発表会 報告要旨】** (修士論文成果報告部門 ①文学)ソルジェニーツィン『第一圏のなかで』について  
スターリンと外交官ヴォロディンの人物像形成を中心に

安井 靖雄 (東大院修士課程修了)

本発表の目的は、アレキサンドル・イサーエヴィッチ・ソルジェニーツィン (1918～2008) (以下、ソルジェニーツィンとする。) の長編小説『第一圏のなかで』 (“В круге первом”) (日本では一般に木村浩の訳で『煉獄にて』として知られている。) を、その作品に登場する囚人達ではなく、スターリンと外交官ヴォロディンという2つの人物像の形成を中心に分析することである。

作者は、1945年2月、軍隊に所属していた時、友人への手紙の中でスターリンを揶揄したかどで逮捕され、矯正労働 (懲役) 8年が宣告された。8年間、数々の収容所を経験するが、最も長く滞在したのがモスクワ郊外のマールフィノ特殊収容所であり (2年10カ月)、そこでの経験が作品に色濃く反映されている。作品は釈放後の1955年から1958年に書かれ、1964年に検閲を通すために修正した。それは1968年西側で出版され、そののち各国語に翻訳され、日本語にも翻訳された。これがテキスト (87章版) である。さらに1968年に修復・追加され、それが「最終版」とされて、1978年に西側で出版され、1990年にはソ連崩壊直前にソ連国内でも出版された。それがテキスト (96章版) である。(なお、この96章版は、英訳は出ているが日本語訳は未だに出版されていない。)

作品の時代である1949年は、当時の最高指導者スターリンにとって重要な年であり、東西冷戦の激化、ユーゴスラヴィアのチトーという社会主義圏での新しい指導者の出現などの事件が起こっている。作品の場所である特殊収容所とは、科学の知識経験を持った囚人 (囚人科学者という) を集めて、軍事兵器を秘密裏に設計製造する特殊な収容所であり、マールフィノ特殊収容所は、通信機器や音響機器を担当している。

テキスト (96章版) では、テキスト (87章版) から新しく10個の章が追加されて、特にスターリンに関する部分と外交官ヴォロディンに関する部分が大幅に増加している。

ロシアの文学者ユーリー・ミハイロヴィッチ・ロトマン (1922～1993) によれば、「主人公 (герой)」とは、多くの障害を乗り越え、境界線を越えて、こちらの世界からあちら側に赴く人物であるとしている。作者ソルジェニーツィンは、スターリンを神学校の生徒の頃からソ連社会の最高指導者となるまで多くの障害を乗り越えてきた「主人公」として描いている。一方、外交官ヴォロディンをソ連社会のエリートである自分に「うそ」をつき続けている状態に強い矛盾を感じ、荒廃した教会をみてロシア正教への回帰を欲し、自ら逮捕される行動をとるというユニークなタイプの「主人公」として描いている。ロシア的なものの象徴とも言えるロシア正教の神学校から無神論的なソ連社会の最高指導者にまで上りつめたスターリンと、ソ連社会のエリートからロシア的なものを求めて収容所に落ちていく外交官ヴォロディンの人物像の形成が正反対の方向性を持っている点が重要である。

**【研究発表会 報告要旨】** (修士論文成果報告部門 ①文学)

## アンドレイ・ベールイ『ペテルブルク』における都市空間についての分析

## ——ドゥートキンの屋根裏部屋を中心に——

木田 貴久 (東大院修了)

本発表では、2023年度に提出した修士論文の概要について報告する。

ペテルブルクはとりわけ19世紀以降の文学作品において、二面性を持つ都市としてしばしば描かれてきた。プーシキンの『青銅の騎士』において都市は創造と破壊のトポスとして描かれており、ゴーゴリの『ネフスキー大通り』に登場するピスカリョーフは華やかな大通りと対照的な細い路地裏に迷い込んだ末に幻覚症状に悩まされ、その身を滅ぼしてしまう。

ベールイの『ペテルブルク』においてそうした二面性は、中心市街とワシーリエフスキー島という都市内部で対立する二つの空間に表れている。元老院議員アポロンが暮らす中心市街は、直線的なネフスキー大通りに代表されるような西洋的な空間で、石という比喻はその権力性を示唆するものである。その一方で、アポロン殺害を扇動した地下活動家のドゥートキンが拠点を置くワシーリエフスキー島は、曲線的な街路を持つ東洋的な場であり、流動的な水というイメージと密接につながっている。

ワシーリエフスキー島の中でも作中で重要と考えられるトポスがドゥートキンの屋根裏部屋である。バシュラルの『空間の詩学』を参照することによって、闇がとどまらず人の思考を明晰にする合理的な空間としての屋根裏部屋という一般的な詩的イメージとは対照的に、ドゥートキンの屋根裏部屋は住人を幻覚症状へと誘い、闇による支配から逃れられていないことが明らかになる。

『ペテルブルク』のドゥートキンと『罪と罰』のラスコーリニコフが暮らす屋根裏部屋には多くの共通点が見られる。ラスコーリニコフの屋根裏部屋をナポレオン主義のメタファーとみなす解釈は妥当であり、そのことを踏まえるとドゥートキンの屋根裏部屋を自尊感情のメタファーとして見なすことは部分的に可能である。そしてそうしたドゥートキンの屋根裏部屋が持つ特徴は『ペテルブルク』の中で、ワシーリエフスキー島が中心市街に対抗する潜在的な力を持っていることを示唆していると言える。

さらに指示役であるリップパンチェンコ殺害に至るまでのドゥートキンの描写を分析することを通じて、ドゥートキンの屋根裏部屋は、影の世界や一世紀前のペテルブルクなど異なる時空間との接点として機能していることがわかる。そしてそれらの特徴はワシーリエフスキー島の潜在的な力や都市の四次元的な広がりを見せ、中心市街の権威を動揺させるという意味において作品の展開に大きな影響を及ぼしていると思われる。



## 【研究発表会 報告要旨】(修士論文成果報告部門 ②言語・芸術)

## 初学者ではない L2 ロシア語の語頭無声摩擦音/sʲ/の音声的特徴

山田 智子 (東外大院修了)

本発表では日本語母語話者が学習する第二言語 (L2) としてのロシア語のうち、語頭の/sʲ/に関する発音の特徴を音響音声学的な視点から分析し、その重要な特性について報告する。/sʲ/はロシア語で **сʲ** と綴るときや、軟母音字が後続するときの口蓋化した **c** の音素のことで、/j/は口蓋化音を示す。ロシアにおける音声学ではキリル文字を使って /cʲ/ あるいは /cʲ/ と表記される。この音素は日本語母語話者にとって習得が難しいことで知られるが、先行研究 (e.g. Vakhromeev 2018) の L2 のサンプルは、「初学者」や「未学習者」に偏っており、ロシア語を話す経験が十分にある、いわば「上級学習者」がこの音素をどのように発音するか、その音声にどんな問題が認められるかについては研究がなされていない。そのため本発表では、恒常的・定期的にロシア語を話す機会がある初学者ではない日本語母語話者を便宜的に「上級学習者」と呼び、彼らがロシア語の音素/sʲ/をどのように産出しているかを観察・分析・記述した結果を報告する。さらに、そこに浮上する特徴のメカニズムについて説明を試みる。

先行研究によると日本語母語話者の初学者は、ロシア語の/sʲ/を日本語で「シャ、シ、シュ、ショ」と発音するときの子音[e]で代用する傾向にあることが分かっている。これは日本語の/s/に/i, j/が後続すると、/s/は[e]として発音される音韻規則が関係している。本研究で調査に協力した「上級学習者」にもこの傾向は観察された。さらに、これまで明らかにされていなかった特徴、具体的には、「上級学習者」の一部が/sV/を/sʲV/で記述できるほど軟音を強調していることが分かった(V は母音を表す)。その強調の度合いは音響分析において明確な線引きを判断することは難しいものの、ロシア語母語話者の聴覚印象によると、分析対象の7名のうち、4名のトークンが[sʲV]と発音されている印象を受けたという。これは初学者ではない L2 ロシア語の特徴として捉えることができる。

このような発音が産出される説明としては、日本におけるロシア語の伝統的な指導法が **c** の口蓋化の産出を妨げ、後続母音に影響を与えている可能性が考えられる。ロシア語を外国語として学ぶための教科書や学習書は「軟母音字」を母音として扱い、授業においてもその教授法が定着している。**я, ю, е, ё** の文字に子音が先行する場合、軟音化するのは母音ではなく子音であることが触れられるようになったのは日本の学習書においては 2010 年代である。軟音の要素は綴りと発音にズレがあること、例えば **ся** の綴りを /cʲa/ と発音するような、綴りでは母音文字に、発音では子音に軟音要素がある事実についてはまだ認知度が低いと言える。この認知度がロシア語学習者の軟子音の発音を左右するのではないか、というのが本研究の結論である。

本発表で展開される議論は、日本におけるロシア語教育の文脈で、文字とその発音の教授法にかかわる問題をよりよく特定し、その解決の糸口をさぐるために利活用される潜在性があり、この研究成果は日本で発展の余地が十分にある、ロシア語の応用音声学の分野に貢献できるだろう。

## 【研究発表会 報告要旨】(修士論文成果報告部門 ②言語・芸術)

## ロシア語における所有構文の統辞構造について

若月 花帆 (東外大院)

本報告では、報告者が修士論文として提出した「ロシア語における所有構文の統辞構造について」の概要を、本研究の着想に至った経緯、到達できたこと、残された課題の3点を焦点に当て、述べる。

まず、ロシア語において、「誰が何を持っている」という表現(以下、所有構文と呼ぶ)は前置詞 *y*+属格名詞句(以下、属格 N(oun)P(hrase))「持ち主」を表わす+be 動詞+主格名詞句(以下、主格 NP)という構文によって表すことができる。

(1) У Михаила была машина.

「ミハイルは車を持っていた。」

本研究では、(1)のような構文を所有構文と呼び、所有構文がどのような統辞構造を成しているのかを明らかにすることを目的とする。

本研究の着想に至った経緯として、(2)のような主格 NP に再帰代名詞が現れている例より、所有構文の所有物を表わす主格 NP に含まれる再帰所有代名詞は所有者を表わす *y*+属格 NP を先行詞として束縛関係が成立することが可能であることが観察された。束縛関係とは束縛原理 A(以下、原理 A)によって定義づけられた関係を指す。(詳しくは後述する。)

(2) У Петра; был свой; чемодан.

「ピョートルは自分のスーツケースを持っていた。」

原理 A は *свой* のような再帰所有代名詞の先行詞がある位置を規定する原理であり、平たく言えば、通常先行詞は主語の位置にあり、再帰所有代名詞は目的語の位置にあることを示している。したがって、(2)のデータにおいて、原理 A に従うならば、構造上 *y*+属格 NP は主格 NP よりも高い位置にあると考えられる。一方で、主格で標示されることになる NP が主格を受け取るには、一般的に主語の位置に NP がある必要があることから、構造上、主格 NP が *y*+属格 NP よりも高い位置にあるとも考えられる。以上のことから次のような疑問が生じた。

(3)所有構文の主語の位置(=I(flectional)P(hrase))にあるのは、*y*+属格 NP か主格 NP か。

いくつかのデータから推論した結果として、3.1 では、(4)のような所有構文のその基底構造は(5)のようになっていることを確認した。

(4)У Петра; был свой; чемодан.

「ピョートルは自分のスーツケースを持っていた。」

本研究において、基底構造という語は移動や格付与を受ける前の構造であることを意味している。3.1 において、所有構文の基底構造について明らかにすることができたが、所有構文に課せられる移動や格付与について、新たに3つの課題が生まれた。

(6) a. 所有構文の  $\theta$  役割について

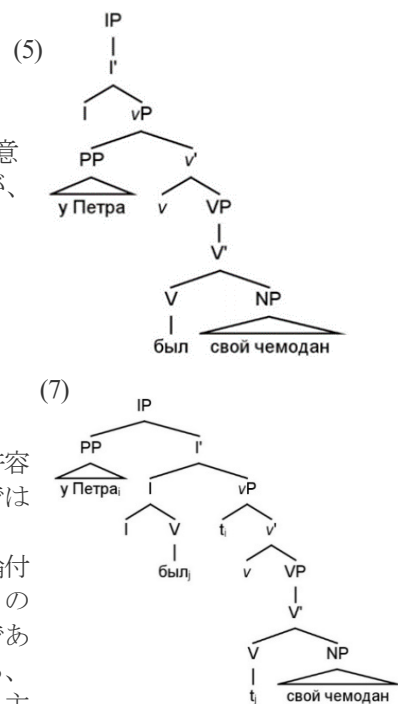
b. *y*+属格 NP の IP の指定部 (SVO 言語における主語の位置の移動と格付与について)

c. 動詞の一致について

これらの課題をクリアした結果、最終的に所有構文は(7)のような構造を得ることになる。

よく知られている通り、ロシア語は SVO 語順の言語であるが、「自由」な語順が許容される。例えば、1 文中に3つの要素があれば、6通りの語順が許される。本研究ではそのような語順を並び替える操作をかき混ぜと呼んでいる。

本研究では、(5)の基底構造が示す通り、*y*+属格 NP が基底部生成されていると結論付けた。ロシア語の基本語順が SVO であるならば、所有構文の P(ostposition)P(hrase)+V(erb)P(hrase)+主格 NP の語順は、かき混ぜが適用された結果であると考えられるかもしれない。(通常主語(S)は主格名詞句であるため)しかしながら、本研究において得られた結論は、かき混ぜが適用される前には *y*+属格 NP + be 動詞+主格 NP の語順が完成しているということであった。本研究において至った結論が機能主義言語学の理論の枠組みとどのように関連するのかという問いは今後の課題の内の一つである。



## 【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門 ②言語・芸術)

BE 型言語である現代ロシア語における HAVE 型動詞 *иметь* の使用範囲

田中 春菜 (東外大院博士前期課程修了)

本発表では、昨年度提出の修士論文『BE 型言語である現代ロシア語における HAVE 型動詞 *иметь* の使用範囲』に基づき、現代ロシア語における HAVE 型動詞 *иметь* の使用状況についてアンケートやコーパスでの調査およびそれらを分析した結果を報告する。

世界の言語には大きく分けて BE 型の言語と HAVE 型の言語というものが存在する。BE 型の言語とは、所有の表現をする際に「私には兄がいる。」のように存在を表す動詞、英語でいうところの *be* 動詞を使用する言語のことである。一方、HAVE 型の言語とは、‘*I have a brother.*’のように、所有を表す動詞(「持っている」を意味する動詞)を使用する言語のことを指す。本研究で取り上げるロシア語は、ほとんどが HAVE 型の言語であると言われているスラブ諸語の中で、唯一はっきり BE 型とされている言語である。通常、ロシア語では所有を表す際は‘*У меня есть машина.*’のように *be* 動詞にあたる動詞‘*есть*’を使用した表現が使われる。ロシア語にも HAVE 型の所有の動詞が存在しないわけではないが、ロシア語の HAVE 型動詞‘*иметь*’は、多くの文献で示されている通り、一般的に「硬く、日常会話ではあまり使われない」とされている。‘*Я имею машину.*’のような文は、文法的な間違いはないが、‘*У меня есть...*’の形の文と比べると違和感があるという。

本研究の目的は、BE 型の所有表現が優勢であるロシア語において、HAVE 型の動詞‘*иметь*’はどのような場合に使用されるのか、またどのような要因によって‘*иметь*’の許容度が左右されるのかを調査し、それらを図として視覚的に表すことである。調査は主にロシア語の母語話者へのアンケート調査および聞き取り調査を軸として行った。またデータの補足としてコーパスによる調査も併せて行った。

アンケートや聞き取り調査の結果、主語が有生の場合、‘*иметь*’が許容される要因として、被所有物の「抽象度」と「譲渡/コントロール可能性」というパラメーターが大きく関わっていることが分かった。またこれら2つのパラメーターの大小によって大まかに以下の4つのグループができることが分かった。それらが①「抽象度」も「譲渡/コントロール可能性」も高いグループ ②「抽象度」と「譲渡/コントロール可能性」どちらも低いグループ ③「抽象度」は低い「譲渡/コントロール可能性」が高いグループ④「抽象度」は高い「譲渡/コントロール可能性」が低いグループの4つである。

「抽象度」も「コントロール可能性」も高いほど‘*иметь*’が許容されやすいため、許容度の順番としては①>④>③>②となるが、文脈の追加などによってその許容度が変わることも確認することができた。

本発表では、修士論文でも提示した図を用いながら、「抽象度」と「コントロール可能性」が複雑に絡むことによって左右される‘*иметь*’の許容度と、文脈の追加や被所有物を表す語の転義によってどのような解釈がなされ許容度が変わっているのかを示す。



**【研究発表会 報告要旨】** (修士論文成果報告部門 ②言語・芸術)ヴェレシチャーギン絵画における印象派とジャポニズムの影響  
——「1812年シリーズ」「ロシア・シリーズ」から「日本シリーズ」へ——

飯田 有季 (千葉大学大学院博士前期課程修了)

本発表では2023年度に提出した、同名の修士論文の概要を報告する。

ヴァシーリー・ヴェレシチャーギン(1842-1904)は、19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍したロシアの画家である。その代表作は戦争画やオリエンタリズム絵画に多く、今日においてはリアリズム画家として名高い。一方で、晩年の作品には印象派やジャポニズムの影響も指摘されている。しかし、これらの指摘は「日本シリーズ」の作品にとどまっており、それ以前の作品については検討されてこなかった。

そこで「日本シリーズ」以前の絵画群に着目して分析を行い、「ロシア・シリーズ」に含まれる1894年の北ドヴィナ旅行に際して描かれた作品に、すでに印象派の影響が表れていることが明らかとなった。この時代はロシアにおいて印象主義が拡大していた時期にあたる。また、ヴェレシチャーギン作品において印象主義的技法が出現する絵画の主題は、ロシア印象派の特徴である「自然の中で人間が文化的な生活を営む様子」に共通する。これらの要素をふまえると、ヴェレシチャーギンの印象主義受容はロシア印象派からの影響によるものであると考えられる。

また、ジャポニズム的な構図を取り入れた画面構成は、「1812年シリーズ」から導入していることがわかった。印象派の画家であり、ジャポニズムにも傾倒したドガの作品に類似する構図を用いていることから、ヴェレシチャーギンはヨーロッパのジャポニズムを介して浮世絵の影響を受けたといえる。浮世絵の影響を受けた断片的、瞬間的な構図は、鑑賞者に臨場感やリアリティーをもたらす意図があり、「1812年シリーズ」では、長年現場主義を貫いたヴェレシチャーギンが実際に祖国戦争を見ることが叶わなかったからこそ、見る人にリアリティーを与えるための手段としてジャポニズム的な構図を取り入れたといえる。

しかし、ヴェレシチャーギンは実際に日本を訪れているという点で、現実の日本には関心を払わなかったヨーロッパのジャポニズム画家とは一線を画している。また、主に版画の分野で強い影響を受けたロシアのジャポニズムとも傾向が異なる。つまりヴェレシチャーギンはヨーロッパのジャポニズムともロシアのジャポニズムとも異なる、独自の立ち位置にいる。

このように「ロシア・シリーズ」と「1812年シリーズ」の創作で試みられた、ロシア印象派とジャポニズムの構図が、のちに「日本シリーズ」への創作に生かされたのである。

**【研究発表会 報告要旨】** (博士論文成果報告部門)

バレエとプラスチックの狭間：20世紀バレエ史における振付家レオニード・ヤコプソンの位置づけ

梶 彩子 (早稲田大学文学学術院次席研究員・日本学術振興会特別研究員-PD)

2024年提出の博士論文「バレエとプラスチックの狭間：20世紀バレエ史における振付家レオニード・ヤコプソンの位置づけ」では、ソ連バレエの振付家レオニード・ヤコプソン (Леонид Вениаминович Якобсон, 1904-1975) の創作活動を取り上げ、20世紀バレエ史におけるヤコプソンの位置づけを再考した。本発表では博士論文の内容を紹介し、今後の課題について述べる。

ヤコプソンはレニングラードを主な拠点としながら、クラシック・バレエだけにとらわれない自由な発想で創作活動の道を邁進した。様々な制約や妨害に抗いながら、作品一つ一つに適した舞踊語彙を生み出し続けたが、ロシア国外で作品が披露される機会は少なく、現在も彼の国際的な知名度や評価は低い。

従来の先行研究では、ヤコプソンについてソ連バレエ史の枠組みを超えて語られることは稀であった。本研究では、ヤコプソンのソ連バレエの主要な潮流に留まらない創作手法の源を、ダンスとバレエにおけるモダニズムの普及 (本博士論文では「舞踊モダニズム」とした) に求めた。舞踊モダニズムの観点からソ連バレエ史を再考し、ヤコプソンの経歴と創作手法を見直すことで、改めて20世紀舞踊史における振付家ヤコプソンの位置づけを行うことを目的とした。第1章では舞踊モダニズムの観点からソ連バレエ史を見直し、ヤコプソンの創作姿勢の根幹には現代テーマの追求があり、現代テーマのバレエ創作のために舞踊語彙を模索していたことがわかった。また、ソ連におけるモダン・ダンスの波及を概観したほか、ソ連では現代テーマのバレエ創作という形でバレエのモダニズムが実現されたことを確認した。第2章ではヤコプソンの経歴の再考を通して、現代テーマのバレエ創作において特に重要なテーマとして第二次世界大戦が浮かび上がった。また経歴を実証的な裏付けに基づき補完した。第3章では舞踊分析を行い、創作初期～中期には舞踊モダニズムの影響を受けながら、彫像や壺絵、フレスコ画を動かすプラスチックや、ジェスチャーやパントマイムを舞踊風につなげることで様々な人物表象を可能にするホレオプラスチックを多用したことを確認した。一方、ヤコプソンは1930年代からすでにクラシック・バレエの腕の規範を壊すなどして、ネオ・クラシックに取り組み始めてもいた。ヤコプソンの創作活動はバレエとプラスチックの狭間を絶えず行き来しながら続けられ、それは晩年、ネオ・クラシックに結実したのであった。

舞踊モダニズムという広い視座からのヤコプソンの再考は、従来切り離されて記述されてきた舞踊モダニズムとソ連バレエの接続の可能性を示唆するものとなった。

**【研究発表会 報告要旨】** (博士論文成果報告部門)

## 現代ロシア語における性に関する一致をめぐって

光井 明日香 (東京外国語大学他非常勤講師)

本発表では、同名の博士論文の概要を、特に記述的な側面に焦点を当てて報告する。

ロシア語の名詞の性は一般的に男性、女性、中性の3つであるとされているが、多くの研究者によって、ロシア語における文法性の理解はこのように単純ではないことが指摘されてきた。例えば、男性を指示する際には男性名詞としてのふるまいを、女性を指示する際には女性名詞としてのふるまいをするいわゆる総性名詞があげられる。さらに врач「医師」のような職業などを示す男性名詞は、女性を指示する際に定語や動詞述語が男性形で一致する統語的一致だけでなく、女性形で一致する意味的一致も行う。このような男性名詞は、特に第1変化の男性名詞については多くの先行研究に記述があるものの、同じようなふるまいをする第2変化の男性名詞、不変化の男性名詞については散発的な記述しか見られない。そこで博士論文では、報告者の行った計4回のアンケート調査の結果も含めながら、現代ロシア語の性に関する記述の全体像を描くことを目指した。

本発表ではロシア語の文法性の対立、特に男性と女性の対立が離散的というよりも連続体的な性質を持っていることを示す。また、本発表では Crockett (1976)の分類に基づいて、主に人を表す有生名詞を有性別 (sex-differentiating) 名詞と無性別 (asexual) 名詞に分けて考察するが、その有性別名詞と無性別名詞の間にも「中間段階」が存在し、連続体的な性質を持っていることも示す。

本発表ではまず、Crockett (1976)が「生物学的な自然性についての言及なしに人間や動物を示す名詞」として無性別名詞について記述的に検討する。最初に文脈によって性の決まる無性別名詞について考察を行い、いわゆる総性名詞は1つのきれいなカテゴリーではなく男性名詞的なものから女性名詞的なものへとある種のグラデーションを描いている連続体的な性質を持つことを示す。そして総性名詞は、あいまいな境界を挟んで第2変化の男性名詞とも連なる連続体を形成していることも指摘する。さらに、その連続体は第1変化の男性名詞や不変化の男性名詞へも連なるものであることを示す。これに加えて、文脈に影響を受けない無性別名詞についても考察を行い、男性と女性の無性別名詞は、文脈に影響を受けない男性名詞と女性名詞を両端に置いた連続体を成していると結論付ける。

次に、人を表す有生名詞のうち、特に男性名詞・女性名詞のペアを成す名詞について、そのふるまいを記述的に考察する。先行研究のうち、Bobaljik and Zocca (2011)について記述的に再検討を行い、その結果はっきりと性の区別の出来る有性別名詞から無性別名詞の間には「中間段階」と呼べるようなものが存在する可能性があることを指摘する。そして考察の結果、有性別名詞と無性別名詞には「中間段階」が存在する、つまり有性別名詞と無性別名詞はそれぞれが離散的なカテゴリーを成しているのではなく連続体的なカテゴリーを成している可能性があることを示す。

## 【規約・執行部】

## 日本ロシア文学会関東東北支部規約

1988年10月5日制定・支部登録

2017年6月最終修正

2022年6月改訂・10月発効

- 第1条 本支部は日本ロシア文学会関東東北支部と称する。所在地は以下の通りとする：  
〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33  
千葉大学文学部法政経学部1号棟 人文科学研究院 大森雅子研究室気付
- 第2条 本支部は日本ロシア文学会の会則に基づいて、その目的達成のために独自に次のような事業を行う。  
(1)共同の研究ならびに調査。(2)研究発表会・講演会の開催。  
(3)機関誌の発行。(4)その他本支部の目的を達成するために必要な事業。
- 第3条 本支部は原則として、関東甲信越および東北地方に居住するか所属先を持つ日本ロシア文学会会員をもって組織する。
- 第4条 本支部について次の機関をおく。  
(1)総会 (2)運営委員会
- 第5条 総会は本支部の最高議決機関であり、毎年1回開催するものとする。ただし必要に応じて臨時総会を開くことができる。総会の議決は出席会員の過半数によって成立する。
- 第6条 運営委員会は支部長と運営委員をもって構成し、支部の運営にあたる。
- 第7条 本支部に次の役員をおく。  
(1)支部長 (2)運営委員 (3)事務局長 (4)監事
- 第8条 支部長は支部選出の理事の互選により選出する。
- 第9条 支部長は本支部を代表し、支部の運営を統轄する。
- 第10条 運営委員は、別に定める選出規定により選出する。
- 第11条 運営委員は、運営委員会を構成し、支部の運営を分担する。
- 第12条 事務局長は、「支部規約に関わる規定4」に則って選出され、会計・事務を担当する。
- 第13条 監事は、別に定める選出規定により選出する。
- 第14条 監事は、年度末に会計監査を行い、総会でその報告を行う。
- 第15条 役員の任期は2年とし、重任を妨げない。
- 第16条 本支部の経費は会費、補助金その他の収入をもってこれにあてる。
- 第17条 会費に関する規定は別に定める。
- 第18条 本支部は、事務局をおき、本支部の会計および事務全般を委ねる。事務局設置の規定は別に定める。
- 第19条 運営委員会は毎年決算報告を作成し、総会の承認を求めなければならない。
- 第20条 本支部の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日をもって終わる。
- 第21条 本規約の改正および諸規定、内規の制定・改正は総会の議決による。

## 支部規約に関わる規定

### 1) 第 10 条に関わる運営委員選出規定

原則として 2 名以上の所属会員を専任教員として擁する、関東甲信越および東北地方にある大学から 1 名の委員を選出したのち、支部長とそれら委員が上記大学所属会員以外から若干名選出する。

### 2) 第 13 条に関わる監事選出規定

監事は、支部会員から 2 名を支部長が指名するものとする。

### 3) 第 17 条に関わる会費規定

年額 1000 円とする。会費の改訂は支部総会の承認を要するものとする。

### 4) 第 18 条に関わる事務局設置規定

支部事務局は事務局長の下に設置される。事務局長は、運営委員会で協議の上、関東甲信越および東北地方にある大学のうち、原則として 2 名以上の所属会員を専任教員として擁する大学から候補を選出し、2 年の任期で任命する。

### 5) 第 8 条に関わる理事候補選出規定

支部選出の理事候補については、支部総会で承認を受けた選挙管理委員会が選挙を実施する。支部選出分 15 名のうち、11 名は選挙結果に基づいて選び、4 名は支部長が運営委員会の承認を得た上で指名するものとする。ただし、選挙結果によって選ばれる 11 名分については、三期連続の選出（過去の支部長指名枠での選出を含め）を認めない。なお、この規定は 2023 年度の理事選挙から適用される。

## 現行執行部

支部長： 楯岡求美

運営委員： 秋山真一、大森雅子、加藤百合、川辺博、越野剛、寒河江光徳、佐藤千登勢、鈴木正美、乗松亨平、長谷川章、前田和泉、八木君人

事務局長： 大森雅子

監事： 朝妻恵里子、八木君人



# 日本ロシア文学会 関東東北支部 研究発表会・総会

於：東京大学本郷キャンパス法文1号館  
113番・112番／Zoom

2024年6月1日（土）10:30-17:05

10:30 開会：支部長挨拶

[修士論文成果報告部門 ①文学] 場所：法文1号館113番

10:40-11:10 梅谷 彩香（東大院修了）

「銀の時代ロシアのアポロン主義芸術論  
——アキム・ヴォリンスキー、マクシミリアン・ヴォローシンを中心に」

司会：草野 慶子

11:10-11:40 飯濱 碧輝（早大院）

「ジュコーフスキイ「村の墓場」(1802)におけるエレジーの主体の革新  
——時空間との関係を中心として」

司会：鳥山 祐介

11:40-12:10 石川 顯法（法政大院）

「ゴンチャロフ『断崖』研究 ——苦悩するヴェーラ——」

司会：澤田 和彦

12:10-13:10 昼休憩

13:10-13:40 栗原 かおり（早大院）

「マリーナ・ツヴェターエワ「別れ」における詩作のテーマ」

司会：前田 和泉

13:40-14:10 宮 将仁（東大院）

「ロシア・フォルマリズムと生産主義」

司会：八木 君人

14:10-14:40 安井 靖雄（東大院修了）

「ソルジェニーツィン『第一圏のなかで』について  
スターリンと外交官ヴォロディンの人物像形成を中心に」

司会：越野 剛

14:40-15:10 木田 貴久（東大院修了）

「アンドレイ・ベールイ『ペテルブルク』における都市空間についての分析  
——ドゥートキンの屋根裏部屋を中心に——」

司会：松本 隆志

修士論文成果報告部門 ①文学 登録リンク：  
日本ロシア文学会関東東北支部 研究発表会（文学）

<https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/meeting/register/tZ0rcO2qqzsuGdTowLm9xhBWQMDgOelaSl3w>



# 日本ロシア文学会 関東東北支部 研究発表会・総会

於：東京大学本郷キャンパス法文1号館  
113番・112番／Zoom

[修士論文成果報告部門 ②言語・芸術] 場所：法文1号館112番

13:10-13:40 山田 智子(東外大院修了) 司会：古賀 義顕  
「初学者ではないL2ロシア語の語頭無声摩擦音/sʲ/の音声的特徴」

13:40-14:10 若月 花帆(東外大院) 司会：堤 正典  
「ロシア語における所有構文の統辞構造について」

14:10-14:40 田中 春菜(東外大院修了) 司会：阿出川 修嘉  
「BE型言語である現代ロシア語におけるHAVE型動詞иметьの使用範囲」

14:40-15:10 飯田 有季(千葉大院修了) 司会：上野 理恵  
「ヴェレシチャーギン絵画における印象派とジャポニズムの影響  
——「1812年シリーズ」「ロシア・シリーズ」から「日本シリーズ」へ——」

15:10-15:20 休憩

[博士論文成果報告部門] 場所：法文1号館112番

15:20-15:55 梶 彩子(早大院次席研究員・学振特別研究員-PD) 司会：斎藤 慶子  
「バレエとプラスチックの狭間：20世紀バレエ史における振付家レオニード・ヤコプソンの位置づけ」

15:55-16:30 光井 明日香(東外大他非常勤講師) 司会：井上 幸義  
「現代ロシア語における性に関する一致をめぐる」

16:30-16:35 休憩

16:35-17:05 支部総会 場所：法文1号館112番

17:30- 懇親会 場所：ピアンタ本郷(東京都文京区本郷2丁目30-7)

修士論文成果報告部門②言語・芸術／博士論文成果報告部門／支部総会 登録リンク：  
日本ロシア文学会関東東北支部 研究発表会(言語・芸術)  
<https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/meeting/register/tZMvdeivrz0vG9LXguSunXfUXro-1R2Wm-H>